

宗 乗 小 見

前 田 聽 瑞

一

宗乗はその宗に屬するものにとつては、そのまゝ一つの修練であり、自信教人信の切實な營みである。従つて宗乗の消長は、その宗門の實態を端的に象徴しているところに、常に大きな意味をもつてゐる。

願れば九歳のとき、叔父の諦譽聽典上人に見出されて佛門に入り、清き吉水の流を汲んで茲に五十有餘年、その間先師提撕の志にそむき、曉月朝風に情塵を洗はず、春風秋雨心を恣にして、急いで日夜に佛法を樂まず、進んで廣く淨土の門を開くことを喜ばず、月流れ年逝いて、いつしか還暦も過ぎてしまつたかと思ふと、無慚無愧、全く夢のようで、感慨もまた一段と深いものがある。いま人生の夕暮に佇んで、はしなくも淨土宗乗のことを想うと、「往き易くして人なし」とか、悲しくも淋しく、わび入りたいような涙ぐましさを覺えるのである。

「文化八年は、宗祖圓光大師六百回の御忌なり、この前後より念佛の弘通いよく盛んになりて、勝尾の山寺

に月參するもの、五畿七道にわたりて、凡そ二十二三國ばかりなりき。」

という一節が『徳本行者傳』の中にあるが、讀んでいると何んだか百四十年の隔たりをとびこえて、言いしれぬ悦びをじかに身に受けるように感じられる。

それからざつと百年、宗祖七百年の遠忌を迎えた明治末期前後の淨土宗は活氣洋溢、宗風顯揚の氣概はその教學の上にも躍如たるものがあつたことは、おぼろげながらも妙に忘れられずにある。

古いところはよくは解らないが、この事に關連して今に想起され感謝されるのは、儒者徹底、道心行誠と並稱された二高僧の動きであらう。明治の初期から中期にかけてこの二人が相俟つて、淨土教學のために或は礎業をたて、或は刺戟を與え、以てその進むべき方向を指した功勳は忘れるものではない。

學者であり、教育家であり、そして詩人であり、書家であり、論客であり、經營の才と指導の能とをもつ養鷗徹定のような高僧こそ、當時の淨土宗はもとより總本山知恩院のためにも無くてはならない人材であつた。この徹底上人が知られているようで案外知られていないのに較べて、福田行誠上人が宗の内外を問はず餘りにも有名であるのは妙な對照である。門人河瀬秀治の書いた「行誠上人略傳」がよく讀まれたのであろうか、思えばその筆致は實に簡勁で、輕妙で、一字の無駄も一句の弛緩もない非常に磨きのかゝつた名文である。しかしその全集刊行の支配力も大きく、一面また明治の歌人として一異彩を放つたことなども影響するところがないとはいえない。

福田行誠の學は、はやく葛城の慈雲尊者の學風に據り、その淨土宗學は専ら四休庵貞極上人の解行に學び、學識高遠、隆然たる徳望は一代を風靡し、その落々として逍遙自在な風格を、人呼んで羅漢行誠と稱したといふ。解行相應じ、福慧共に高く、明治佛教史上の第一人者であることは茲に贅するまでもない。京都大雲院の北條的門もま

た同時代のすぐれた學匠で、淨土宗學には特色ある手腕を揮つたものである。

明治も中期には入ると、俄然護教興學の機運が動きはじめ、篤學達識の學徒は濟々として桃李その芳を競い合つた。就中神谷大周、黒田眞洞、勤息義城、大鹿愍成の諸師は自らその群を抜き、各々一方の雄鎮として學壇に飛躍した。神谷大周は篤學宏辯の士で、布教家としては確に一頭地を抜き、またその著「結縁五重筈蹄」は行誠上人の説を承けて、傳法上の論評に再び火をつけたもので、ために學界は意外の活氣を添えた。

「吉水のよしや濁るもくみかへて昔にかへせしづくばかりも」と行誠上人がその將來を期待した黒田眞洞は、天性また穎敏活達、なか／＼の雄才で、學も深く、門下も多く、教學の振興發展の上に多大の功績を残した俊傑で、確にこの時代の代表的人物である。著書に乏しいのは聊か淋しいが、その著「佛陀の光」は遠く米國の宗教界で好評を博した。勤息義城は天台學と宗學にくわしく、その著「傳語金鑑論」は行誠、大周の説に眞向から楯突いたもので、その篤學護法的情熱は暗々の中に一宗の尊敬を一身に集めた。大鹿愍成は唯識學を専攻して學博く、更に宗學に通じ、晩年師の机邊を離れなかつた篤學の士は多かつた。

明治の末から大正にさしかゝると、桑門秀我、土川善濃、林彦明、望月信亨、荻原雲來、渡邊海旭等の學匠が色とり／＼續々と學界に登場し來つたことは、單に淨土宗の光榮ばかりではなかつた。「法然上人全集」とか「淨土宗全書」というような全集物にいち早く着眼し、立派にこれを出版し完成した當時の淨土宗の人たちは、實にえらいといわねばならぬ。更にまた荻原雲來、渡邊海旭の俊英を遠くドイツに送り、兩師また刻苦精勵、數年に亘つてその大材偉器を玉成し、やがて隆々たる聲譽を荷うた兩師の錦歸を迎えたのも、當時の淨土宗であつた。布教傳道もまた當時の天才によつて、始めて確實にその基礎を据えたといつてよい。名篇「説教惟中策」を書いて敢然布教

熱をあふつた岸上恢嶺は實に斯界の新機運を開拓した第一人者で、極筆贅嘆を惜しむものではない。それから「青民遺書」で今にその教化熱を想わしむる原青民、後年光明會を率いた山崎辨榮、中嶋觀琇、大門了康、岩井智海、郁芳隨圓なども亦この期における布教界の異彩であつた。更に有爲の布教師を海外に派遣駐在せしめたのも、亦當時の淨土宗であつたことは忘れられない。

かく駿々乎として盛り上つて行つた光彩ある、時の淨土宗管長、知恩院門主の猊座にあつたのが、一代の高僧山下現有で、時すでに齒徳正に高く、世の敬重もいよ／＼加はつた明治四十三年、わが宗門は總本山知恩院に於いて宗祖七百年の大遠忌を迎えたもので、その堂々たる盛儀、全國から馳せ参じたおびたゞしい老若男女の人波、その洋々たる念佛の聲、華頂山頭にどよめき渡つたその法悦境は、今も目に見るような心地がする。恰かもその頃、後年の大碩學、椎尾辨匡氏は既に圓熟して學界に強い反響を呼び、やゝ年少の秀才、矢吹慶輝氏がその勞作「阿彌陀佛の研究」を世に問うたのも、またこの頃であつたのである。

時光流轉、人去り時移つて茲に四十年、その宗門は近く十年にして宗祖七百五十年の大遠忌を迎えるのである。半世紀に一度の御遠忌である。またそれだけにわが宗門に寄せる内外の注視と期待も甚だ大きいことは當然覺悟せねばなるまい。

ところで、最近わが淨土教學の不振と低調ぶりが、眞面目な青年層の心を曇らせていると、よく噂される。これは事が事だけに聞き捨てにならぬものがある。それにしても、この憂心忡々たる嘆きが、宗門に光を見出そうと眞劍に願つている人たちの間に多いという現象は、またそこに明るい面があるとも考えられるので、見方によつては却つて力強い、興味の深いことではなからうか。

好かれ悪しかれ、私たちは宗門をよく知らねばならぬ。今日の宗門をもつと探つて見れば、そこには愛宗護法の高い心が在在處處、惶々として生動していることも見逃し得ない大きな事實だと思ふ。一方には孜孜として宗學と取り組んでいる老學匠があるかと思へば、一方には梵語の研究などで身をけづつている老友も至極健在である。その他佛大、正大の研究室では堅忍不拔な壯年教授によつて精透博洽な宗學、佛教學の研究が靜かに、しかも着々と成就されつゝある。むろん學者の仕事は地味である。十年前に世に出た佛敎専門學校編の「淨土宗辭典」にしても、正大教授藤本了泰君編の「淨土宗大年表」の如きも、實に拮据幾年、靜かな研究室での編集事業で、その成果はそのまゝ絶大な宗門の事業であることを想ひ見ねばなるまい。深く探つてみれば、こうした人目を惹かない宗學の研究が東西の學徒の間に非常な勢ひで起つていることを思えば、前途明朗、宗光増輝、眞に人意を強うするに足るものがある。かゝる淨土教學の輝かしい歩みは、やがて次の半世紀を光に導くであらうし、また近く嚴修されようとする宗祖七百五十年忌を大きく意義づけるであらう。

一概に過去を黄金時代のように考へ、今日を衰微時代と見るようなことは、私は取らない。東天一たび白めば、日の昇るのは案外早いものである。「老いぬとてなどかわが身をせめぎけん、老いずば今日にあわましものを」。近い内には日本にも淨土宗にもよいことが澤山ありそうに思えてならない。還曆を過ぎた一介の老いの身にも、どこか何か脈動するものがあるように感じ来る。古語に「縁に遇えば廻心向大す」ということがある。今回の厚意ある頌壽の機縁は、人生むしろ功なきを恥する次第であるが、縁は縁として悦んで、廻心一番、同行の立場において、宗乘のことを少し話してみたいと思う。

二

往時を追想すると、宗乘という言葉は學園の若い人たちにはとかく不評判で、魅力がなかつたようである。それは過去の言葉の暗さであつたかも知れぬ。やがて宗乘が淨土宗學となり、淨土學と移つて行つたのもやはり時代の波で、あながち悪い事ではないが、何だかスケールが狭まつた感じを受ける。自信と教人信、自行と化他、元來こゝうした大きな幅をもち、その役割を荷負う宗乘という言葉の重みは、また格別で、大いに推賞に堪えるものがあるのである。

今日では宗乘という言葉もいよゝ時代後れになつて解説が要るまでになつて來た。私はキリスト教における神學の型をおもしろく思つて、宗乘を思ひ浮べることによくあてはめて見ることがある。

神學はキリスト教的信仰の立場に立つて、その宗教の眞理性を明確に理解せんとするものである。時には外部の非難に對してその眞理の辯護に起つこともある。従つてそこにはある特定の絶對者やその信奉すべき聖典、その見方、味い方までが豫め與えられていることになる。その與えられた限りにおいて、一方ではその理解と信仰を深め、一方ではその教を宣布すべき使命を藏している。この意味でその性向は獨斷的である。その點、その學問的在り方など、われ等の宗乘とその性格を同じくするものと云えよう。

宗乘、その言葉の重み。そういう宗といい、乗とは一體どんなものか。まづ宗といふことから考えてみよう。

『和語燈錄』卷四、「十二問答」の中に、宗祖の御言葉としてこんな意味のことが書いてあつた。

「宗の名をたつことは佛の説にあらず。みづから心ざすところの經教につきて、その教ゆる義を悟り究めて、宗の名をば判することなり。」

して見ると、その宗というのは主義、主張、立場或は信念とでも解すべきで、従つて獨斷的たらざるを得ない結果になる。その點、宗としての自信は却つて強く深いものがある。「勅修傳」第五の中に、同じ宗祖がまたこんな意味のことを述べていられる。

「凡そ一宗の習ひ、一代聖教におきて淺深を判する、常のことなり。しかれば一切經は同じく釋迦一佛の所説なれども、宗々の所學に従いて淺深勝劣不同なれば、いづれの宗の一切經といふべし。天台宗の一切經あり、華嚴宗の一切經あり。」

物は考え方、見方である。十人十色、白色には白光があり、赤色には赤光がある。一切經はいづれも佛の説であるにしても、自らその心ざすところによつて、人々各別、その取捨選擇も變つてくるであらう。一方で傳教大師が法華一乘主義によつて天台宗を開くかと思えば、一方では弘法大師が眞言宗を立て、法身大目の密教をつかみ出している。法然上人になると時機を叩いて淨土宗を立て、同じ法華經を讀んでも日蓮聖人は大先輩傳教に同調せずして別に日蓮宗を創めている。一水四見、同じ谷川の流でも魚には住家であり、人には清冽な思いを湧せるであらう。一切經もまた見方考え方で、それ／＼の色がつき、それでこそ新しい生命もふき出してくるのである。その見方、考え方が一つの宗であるから、その宗、その宗の一切經が成り立つ譯で、「天台宗の一切經あり、華嚴宗の一切經あり」ということになる。この意味において傳教なきところに天台宗はなく、法然なきところに淨土宗はないのである。従つてその宗、その宗派においては、その宗祖なり開祖の地位が果然飛躍して直ちに大恩教主釋尊のそれに

まで高められるのは別に不思議なことではない。「わが大師釋尊は法然上人なり」（勅修傳卷四十六）と述懐した鎮西上人の言葉は味ひが深い。

宗のことはこれ位にして、その宗乗の「乗」というのは一體どんな意味なのか。それは乗り物のこと、その力と働きとは説明を要すまい。つまり一切衆生を滿載して、ひとしく解脱の彼岸に運んでゆく教法に譬えた佛教独自の用語である。従つて「念佛とは昔法藏菩薩大悲誓願の筏、今彌陀覺王廣度衆生の船なり」（宋代念佛授手印）とか、「名號本願の船にのりて、彌陀如來を船師とし、釋迦發遣の順風にほをあげて」（勅修傳卷四十四、隆寛律師の詞）などと表現する習いも、あながちわが宗に限つたことではない。佛教で一乗といふ、一佛乗といつてゐる「乗」の意味が元來それなのである。それから一乗や一佛乗の「一」は、或は唯一無二の「一」と見たり、或は非一無數、一切の意味にとることもあるが、これは兩者を互に關係させ、むしろ相即した意味において理解した方が全體を貫いた解釋のように見える。とも角、こうした一乗佛教を歴史の流れにおいて捉えてみると、傳教大師は法華一乗、弘法大師は金剛一乗、法然上人は南無阿彌陀佛の一乗、更に親鸞聖人は本願圓頓一乗、日蓮上人は本門一乗、以上各々その立場によつて違うが、一乗という點では皆同じことである。

三

以上を前置きとして、當面の淨土宗乗のことを考えてみよう。

『西宗要』第二の中に

「淨土宗の一乘は一向專修の南無阿彌陀佛の一乘なり。」

とあるが、その表現の巧みさ、その言葉の強さ。宗乗するものは、まづこの言葉の光を捉えることを忘れてはならぬ。

「阿彌陀佛といふより外は津の國の、なにはのこともあしかりぬべし。」

宗祖の面目はこの御歌の上にもよく現れている。宗祖の御作で、廣略開合の關係にある『選擇集』と『一枚起請文』の所詮はもとより南無阿彌陀佛、從つて『安心請決略抄』が「所詮當流の相傳を堅に談じ横に學すと雖も、一枚起請に習ひ收むる、これを故實となす」といつているのも固より當然である。南無阿彌陀佛、これが淨土宗乗の終りであり始めであらねばならぬ。

歴史的には淨土宗の由來する源は遠く、深いようである。しかし中里介山氏の見方にもまた棄てがたいものがある。その著『法然』のはじめに、「唯一の創立者」という一章があつて、その中に

「法然の宗教があつて、善導があり、五祖があり、三部經があり、二尊があるのである。法然はこれ等を祖述してゐるのではない。これ等を自分の宗教の註釋として用ひてゐるのである。といふことにふと氣がついて見ると、法然といふ人と、宗教といふものゝ本質に近くなつて來る。」

とある。法然上人とその宗教をこんな風に見究められたことは、たしかに有益な文字であつた。かく見立てることは、やがて法然佛教の讀みを深めることになる。

法然上人の立場は「偏依善導」であつた。その證據はあまりにも著しいが、一寸『和語燈錄』卷三を披いても「いかにめでたき人と申すとも、善導和尚にまさりたてまつりて、往生の道を知りたらんこともありがたく候。又

善導はただの凡夫にはあらず。即ち阿彌陀佛の化身なり。」といひ、「仰いで本地を討ねれば、四十八願の法王なり。十劫正覺の唱、念佛に憑あり、俯して垂迹を訪へば、專修念佛の導師なり。三昧正受の語、往生に疑ひなし。本迹異りと雖も化導これ一なり」と、主著『選擇集』の上にもその偏依善導の強い信仰告白を聞くのである。

しかし、法然上人を宗祖と仰ぐものの立場からすると、自らまた一つの見方が生まれてくるのではないか。法然上人が「父の遺言忘れがたく」法を求めて三十年、求道の苦い試練をかさね、嘆きと寂しさの果てに、また偶々披いた善導の『觀經疏』——「一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者是名正定之業、順彼佛願故。」この短い一文に深くも見入つた途端、上人はハツと驚き、頭が自然と下つて、この善導和尚の前に、南無阿彌陀佛と掌を合せたのであつた。まことにこの驚きこそは、そのまま上人の悟りであり、喜ぶべき興法開宗につながる機縁というものである。法然上人の悟り、その自證こそ、淨土宗のはじまる基本である。この意味において、淨土宗、淨土宗乘である限りでは、「偏依法然」がむしろその本筋であり、常に法然上人が依處であらねばならぬことになる。

「我等は法然上人を信じ奉り、法然上人は善導を信じ奉り、善導は釋迦彌陀を信じ奉り給ふなり。」（西宗要第四）この二祖鎮西上人の言葉には實に名狀しがたいほどの心の深さがある。この心、この心構えこそ淨土宗乘を貫く大精神であらねばならぬと思う。

四

淨土宗の學者はまづ此旨を知るべし。有縁の人のためには、身命財を捨てても偏に淨土の法を説くべし。自らの

往生のためには諸の囂塵を離れて、専ら念佛の行を修すべし。此の二事の外、全く他の營みなし。(十六門記)

これは宗祖が同後に贈られた教誨である。この實行を誓う心こそ、またわが淨土宗乘の道を自得せしむる光である。

わが宗乘の道には自行と化他の両面があるとして、さて然らば何をどう讀み、どう學ぶべきか、まづ自行の面から手探りを始めよう。

昔から宗乘研究の上では、二祖三代の定判ということが云われる。二祖とは高祖善導と宗祖法然、三代とは宗祖と二祖鎮西と三祖記主、これ等の傳々列祖の教説が即ち定判と呼ばれる與えられた型である。型といつても、それは何等かの意味における師弟關係を意味する。そうした意味での型を傳統といい、傳統宗乘とも稱する。

かゝる傳統を便りに、宗祖の求めたものを求め、高祖善導の心を尋ね、或は二祖鎮西の聲に聞き、三祖記主の教に探つて素直に、懸命に修業すれば解行も自ら相應してくるであらう。かくて愈々宗を敬い、益々法を喜び、やがては一寸した言葉の端にもその心がらが現れてくるようになる。その到りついた境地は自らその人を莊嚴し、その人獨自の風格を備えしめるであらう。しかし型に吞まれ、型に捉われてはならぬ。われ／＼が型について學ぶべきところは、問題の解き方である。途の切り拓き方である。

先人の教説に於て、その體驗を内面的に生かし、自身の進むべき方向を發見するにある。従つて型に入つて型に墮しては、それはたゞ因襲にすぎない。型に入つて型を忘れ、しかも出入自在、その稟性に隨つて、日々に新たに、常に潑刺たる信仰を深め、一箇の獨立せる人格として、自行し化他してゆくことが、眞の宗乘の道ではあるまいか。

世の藝道にもやはりかゝる型があつたと思う。

「すこしの事にも先達はあらまほしきことなり」と『徒然草』に興深く書いてあつたと思うが、ことに宗乗を學ぶものには、先徳のすゝめはいかにもありがたい。

正信房湛空の詞に

「稽古を事とせず、小學の單修をこのみて、學問選擇集にはすぐべからず。」（勅修傳第四十三）

顯密兼學の學匠であることは、多くの人が湛空に許したところである。その湛空が宗祖に師事して專修念佛に分け入つた心底を知るには、この詞にまさるものはなからう。いかにも一見識ある、敬誦すべき文字である。

徳川末期の學僧、學信和尚の常の詞に

「一大藏經の要は淨土三部經に歸し、三經の要は言水繪詞傳四十八卷に歸し、繪詞傳の要は一枚起請文に歸し、起請文の要は六字名號に歸するなれば、たゞ一向に念佛すべし。」（學信和尚行狀記）

とある。その道の達者の言葉だけに、おろそかに出来ないものがある。何をどう讀み、どう學ぶべきか。この和尚の述懐は「淨土宗學入門」のよい手引を提供しているように見える。これによると、讀むべきものはまづ「淨土三部經」から「勅修傳」、「一枚起請文」あたりに落つきそうで、およその見當はついたといつてよい。それから先は奥の千本、數限りもないが、今の學信和尚の言葉の端にも、大藏經のことが一寸顔を出していたようである。「われ君を待つ。君來らばそれ蘇えらん」と『書經』にもあるように、大藏經のよきはまた格別で、顔をそむけてはならないものがあるわけである。

さて、宗祖の御詞に

「淨土の一門に入らんと思はん人は、道綽善導の釋もて所依の三部經を習ふべきなり。」（和語燈錄一、往生大要抄）

とある。淨土三部經はわれ等の所依である。かく所依の經典をもつということは、それ自體宗教的なことである。持經は聞法であり、聞法は法悅を呼ぶ。どの經典でもよいということは、結局經典を持たぬことである。それから特に「道綽善導の釋もて」との仰せは溫い忠言であると同時に、宗には宗の道があるからである。

「勅修傳」については、和製の三部經だとねぶみした古徳もあつたように、その宗典としての地位も高く、ことに愛され親しまれる點では、恐らく宗典中の隨一であろう。淨土宗學は本書によつて確實に前進するように見える。關通上人が「御傳及び和語燈錄は常にくりかへし拜誦して、大師の御教訓を、心にきと領納すべし。」（關通和尚行業記中）と言つたのも味が深い。「學道の人、見るべくんば語錄等を見るべし。」（正法眼藏隨聞記二）と道元禪師が教えたことも思い合わされる。先賢古徳がこんなにまで語錄を注意し、それに思いを潜めたかと思つた。行き得た人の常の詞には、何か突々として迫つてくるものがある。

「選擇集」といえば、何といつても淨土宗の奥義書である。昔から「選擇集」を喜び、その草編三絶の人たちは今昔に亘つて極めて數多い。入門書としては難解であるにしても、宗典としての重みが私たちの心を捉えて離さない。正信房湛空の言葉も、また忘れるものではない。曰く、「學問、選擇集にはすぐべからず。」と。私もまづ讀むべきものとして「選擇集」をとりたい。しかし一步退いて「廣くすれば選擇集、縮むれば一枚起請なり」（一枚起請辨述）という義山上人の見方に照し出せば、今の學信和尚の指導ぶりに、また深い含みがないとはいえない。

「勅修傳」を勧めた學信和尚が「繪詞傳の要は一枚起請文に歸し、一枚起請文の要は六字の名號に歸するなれば、たゞ一向に念佛すべし」と結んだことは、更に意味深いものがあるではないか。

宗典はたゞ讀むだけが能ではない。讀み方が淺ければ言葉の祕密は解るものではない。讀んで味つて、道心をかき立て、人間にみがきをかけ、更に信をとることを念としたい。

残るのは闍藏の問題となつたようだが、例によつて行誡上人の意氣は物すごい。曰く、「一度大藏經を通讀せざる者は、坊主仲間には這入らぬほどのことなり。」（行誡上人全集、學問の用心）かかる激勵を身に受けて心を澄ませると、さまざまの記憶が浮んでくる。さし當り、善導大師の『觀經疏・散善義』の一節が心頭を掠める。

「若し解を學ばんと欲わば凡より聖に至り乃至佛果まで一切礙り無し、皆學ぶことを得よ。若し行を學ばんと欲わば必ず有緣の法に籍よれ。少しく功勞を用ふるに多く益を得。」

解學即ち研究の面では、秋霜烈日、學問、佛道のきびしさに慄然とさせられるが、それは佛道そのものの性格であらう。これとは逆に行學の面では「必ず有緣の法によれ」と示されてゐるのは、また想ひ見ねばならぬことである。解と行との二つの道が、今更のように感ぜられる。

宗祖の御詞に

「凡そ淨土の學人、またまさに大藏經を學ぶべし。しかる所以は、此經三福業の中に説くところの諸行の行相、散説して已に諸經の中に在り。諸經を學ばずして何を以てか之を知らん。矧んやまた解説の法師をや。」（漢語燈錄八、逆修說法）

この言葉は特に法を説く人に向けられている。思わねばならぬことである。

鎮西上人もまた解學を求める心が強い。

「沙門某甲、昔聖道門を學せしの時、聊か彼の淨佛國土成就衆生の義を習ひ傳え、今淨土門に入るの後、また此の選擇本願念佛往生の義を相承す。二師の相傳を以て聖教の諸文を見るに、その義更に以て教文に違わす。單聖道門の人、單淨土門の人之を知るべからず。聖道淨土兼學の人之を知るべし。この意を得てより、一切の大乗經を披き、一切の大乗論を見るに隨喜の涙禁じがたし。」（徹選選集上）

「單聖道門の人、單淨土門の人は之を知るべからず、」この言葉の鋭さ、その妙味。この言葉一つ見出すにさえ上人はその生涯の大半を費したかも知れぬ。

閑藏も大切である。研究ももとより結構である。だが「學生骨になりて、念佛やうしなはんずらん」（勅修傳二十）と宗祖は常々弟子たちに教えられたという。學生骨、今日の言葉でいう學問の奴隷となり、學問に囚われては、却つて肝心の念佛がお留守になる。これでは學道も正に本末顛倒で、しかもこれは解學の人、書齋の人が案外落ち込む魔事であり、魔處である。清澤滿之先生の「懺悔錄」の中で、次のように書きつけてあるのを見たことがある。「如來の奴隷となれ、その他のものゝ奴隷となることなかれ。」

五

何を讀むべきかについて段々語つて來たので、次にどう讀めばよいか、ということに及ばなければならぬ。

經典とか宗典とかいう典の字は、台の上に書物を置いて尊び崇めた形で、そこには合掌三禮して讀まるべきものという心がある。讀み見るたびごとに、「無上甚深微妙の法は百千萬劫にも遭遇すること難し、我今見聞し受持

することを得たり、願はくは如來の眞實義を解せん」の開經偈を誦するのも、單に佛教者のたしなみばかりではない。「卷を開けば益あり。」經典はくり返して讀めば誦むたび毎に感激を新たにするものを持つてゐる。古くして、しかも永遠に新しい書籍である。芭蕉は「一字の師恩たりとも忘るゝことなかれ」と門人を誡めたと聞くが、まして甚深微妙の法を説く經典である。まづ押し戴いて讀むべきが當然の作法でもあり、またかゝるひたむきな敬虔さがあつてこそ、始めて心の眼も開けてくるのではあるまいか。

なる程、今日では經典も宗典もともに難解であらう。けれども、とかく讀まれずに棚上げになつてゐることも爭えない。つんどくは一種の怠慢である。讀み習えば關心を呼び、讀みつゞければ存外解つてくるものである。行誡上人が「とにかく平日なぐさみのやうに讀書すべし」(遺書)といつたのは、意義深いことである。なぐさみとは、低い遊びや楽しみのことではない。なぐさみは遊戲と相通うものがある。遊戲・スポーツには束縛もなく、利害の心が加わらない。自由であり、眞剣であり、無念無想である。そこにはもはや苦勞という感じはなく、一つの三昧境である。深い、落ちついた心境である。

斯うした學道三昧に入れば努力と遊戲とが一致してくる。そこには躍進があり、飛躍があり、何事を以ても奪うべからざる法悦があらう。

道元禪師が「學道勤勞して、他事を忘るれば、病も起るまじきかと覺ゆるなり」(正法眼藏隨聞記五)といつたのは當然の言である。

ところで、佛典には佛典の讀み方がある。やはり行誡上人がそれを言つてゐる。

「特に佛學の如きは、まづ其初めに發願して、何んでも佛法の本意を知らんと大誓願を起して、而して後之を讀み之を學ぶにあらざれば到底之を解し得ること能はざるものなり。」（行誡上人全集、其發願を要す）

「佛學は信じて疑はざるが本にて、行はれざるも行ひたしと思ひ、悟られぬも悟りたしと願ふを學者の志とす。名目などを覺へて博學をてらふは佛の心にあらず。」（同上、佛書の讀み方）

要は開經偈の精神を活かせて讀めということで、それによつて始めて佛の法藏に入り、更にくり返し反覆して讀むことによつて始めて如來の眞實義が胸に落ちてくるというのである。蓋し行誡上人の鞭策は宗教者にとつては恐らくわかり切つた常識であらう。その常識が絶えず論議されるところに、道心の貧困さを歎く強い心理がある。

「道心のなきことと病ばかりやなげきにて候」（和語燈錄卷三、要義問答）と、宗祖が仰つたことを思い出す。學道者はたゞ病氣だけを歎き悲しんではならぬものがある。

「佛說阿彌陀經心經法華經と讀み誦めど、心の空虚うつろ満しかねつも。」最近こんな歌をどこかで見たが、どういふものか、こうした心の空白を経験するものは、今も昔も變りはない。左記は宗祖がある學道者に應答されたものゝ一つである。

「人なみ／＼に、淨土の法門をきき、念佛の行をたつとも、信心いまだおこざらん人は、たゞ、懇ろに心をかけて常に思惟し、また三寶にいのり申すべきなり」（勅修傳十九）

時代こそ異れ、昔の學者も今の歌人も、その心その悩みにおいて見るならば、兩者は共に同じような求めて充されない光の飢に萌しているかと考えられる。こうした苦くるい求道告白には何となく共通なものがわれ等の心にも見出

されて、特別の親しみとなつかしみを覚えさせる。

「たゞ懇ろに心にかけて常に思惟せよ」という詞は、確に求道者に對する何よりの警鐘であろう。孔子も「學びて思はざれば則ち罔く、思ひて學ばざれば則ち殆し。」と訓えている。思うというのは讀んだこと、聞いたことだけを思い返えしては反芻してみるばかりではあるまい。それは廣く天地自然の聲、諸法實相の調べにも耳を澄ませ、人生の生きた事實、緣起の相にも思いを運ぶことであらねばならぬであろう。如來のいます須彌壇を三市するの思いで、讀んだ經典にこもる大悲心に思いを潜めるもよい。あの『平家物語』の中に身を置いて、宗祖をもとめる時代の聲を味わうことも、亦無意味とはいえない。たゞ懇ろに心にかけて常に思惟一番することである。言近くて意味の深い最勝甚深の法門はちよつとやそつとでその要妙に徹到するが如きことは到底あり得ないのである。あの鎮西上人でさえ絶えず「あかつきのねざめの床」に端坐思惟されたということである。弘法大師に「閑林獨坐草堂曉」の詩があるのも何だか暗示的である。

宗祖は更に教えて「また三寶にいのり申すべきなり」と、その灸所を指していられる。三寶に祈れというのは、篤敬三寶の心なくしては學道は成り立たぬということである。しかしその祈りもわれ等の場合は本願乗托を思い念ずることであればよい。阿彌陀ほとけ我を助け給へと祈るもよい。いまそれに連關して切に勧めたいのは、やはり宗祖の御詞である。曰く、「人の手より物を得んずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざるといづれが勝るべき。源空はすでに得たる心地にて念佛は申すなり。」（勸修傳二十一）と。「凡て祈りて願うことは、すべて得たりと信ぜよ、然らば得べし。」（マルコ一・二四）とキリストもこのことを私達に教えてくれる。

宗典を読む場合、たとい讀むには讀み得ても、必ず良い先輩や正しい助言者の言葉に耳を傾けるだけの謙虛さは當然もつていなければならぬ。師に俟ち、師を叩くことは讀みを深め、更に道を求めるための一つの途を意味する。師が居なければ道は傳はらない。宗祖の御詞に「口傳なくして淨土の法門を見るは、往生の得分を見失ふなり。」（勅修傳二十一）とある。正師に就いてこそ、はじめて傳統の意味に徹し、道も開け學も進み、その結實に期待がかけられるのである。

また經典宗典を讀むことは、即ち法を聞くことであると解するのも、亦學道自體に活を入れる方法でないとは云えない。私はこういうことを考える時、「聖教を讀みやぶれ」（御一代記開書第五節）といった蓮如上人は、實に飽くことを知らぬ聞法の人であつたと思う。金ヶ森の善從に、ある人が、「この頃はさぞ徒然でしよう」と云つた時、「我が身は八十に餘るまで徒然といふことを知らず。その故は彌陀の御恩のありがたきほどを存じ、和讃聖教等を拜見申し候へば、心面白くもまたたふときこと充滿するゆゑ、徒然なることも更になく候（同上第一九七節）」と答えたというが、いかにも上人の御弟子らしい感じを受けると共に、眞の聖教讀みという風情もあつて、心を惹くことが深い。『觀無量壽經』の中に「法を聞くことを得たるが故に顔色和悅せり」とあるが、眞に法を聞き得た者には和らぎと悦びがあり、それが相好に現われてくるのも理のないことではない。法の不思議というか、聞法の人は何か美しいもの、何か溫いもの、何か懐かしいもの、何等か優れたものを持つてゐる。

法を聞く心はまた道を求める心である。至心に道を求めることは、愛なく、利他の心なくしては叶わぬことであ

る。かゝる自利行は利他を内容とする點において、それはそのまゝ諸佛を供養することであると見られるのも當然であつた。『無量壽經』の「一切の斯れ等の諸佛を供養せんより道を求めて堅正にして卻かざるには如かじ」という金言は鋭くも三世十方を貫き、切々として我々の胸をうつではないか。

この邊で、お互に自省し自戒せねばならぬ問題が一つある。それは禪勝房以來云い古した通り「淨土宗の學問の所詮は、往生極樂はやすき事と、こゝろうるまでが大事なるなり。」（勅修傳第四十五、禪勝房の詞）ということである。その往生極樂の大事は、願行相續、南無阿彌陀佛に極まる、というのが一宗の故實である以上、禪勝房の忠言は強く身にしみ亘るのである。だが、この點に深い反省もなくたゞ學に溺れて、いつまでも螢火一分の智に執着していては、結局生命の道を見失う外はあるまい。お互に自戒したいのはこの呼吸である。禪家に指月の譬もあるように、指は月を見させるための方便で、月を見たら指は用のないものである。指の役割は月を見るまでのことである。淨土宗學にしてもその狙いはやはり同じで、安心決定、願行相續、念佛を喜び唱え得るまでが大切で、こゝが學問の妙致である。「讀んで忘れる」その忘れるということも心の生活としては大事なことではないか。讀んで、讀んだものゝ相が無くなくなつて、たゞ精妙だけが残るというような學問は、ある意味から言えば、相當高く評價さるべきだと思ふ。

「學者になる學問は容易なるも、無學になる學問は困難なり。」という勝海舟の言葉もまた意味が深い。おぼえたものを一旦忘れなければ、本當のものが出てくるものではない。眞の學問というものは、おそらく學問を忘れ、學問を超過した境地であるような心地がする。これは學問、讀書の上のことのみ限らない。書道、藝道の祕訣も、

實はそんなところに潜んでいるのではあるまいか。

六

自行の面は一應これ位で打切つて、次に化他の面を少し覗いてみよう。佛教での場合、化他ということは自行を離れては考え得ないから、化他を語らんとして自行の話に墮するかも知れぬ。しかしそこが佛道性ともいふのであろうか、自行と化他とが相即相入するところに、佛道を生きる心があるからである。

眞に自行化他を願ひ求むる心、——關通上人に學ぶたびに感ずるのは、その心である。

『關通和尚行業記』を披くと、その中でいろ／＼な上人の御姿に接する。「元亨釋書」を介して偶々宗祖傳に讀み入つた上人が、卷を閉ちて深く法然、三昧に住していられるのを見出す。孤影飄然、杖錫を友として自行鍊成のために行脚している上人をも見出す。寒林で捨つた骸骨を庭前に置いて心行を策勵している上人をも見出す。閑寂の草庵で精進潔齋、ひどく痩せ細り乍らも念佛三昧のあけくれ、自行化他の志操をみがいていられる上人をも見出す。

自行發願文

願クハ弟子關通、道心堅固ニシテ一切ノ世事世望ヲ斷却シ、一切ノ諸願諸行ヲ廢捨シテ、唯往生ノ一事ヲ願ジ、偏ニ念佛ノ一行ヲ修シ、身心壯健ニシテ日日修行増進シ、人情ヲ放下シテ佛語ヲ信獲シ、祖訓ヲ服膺シテ正信ヲ決了シ、念念稱名相續シテ遂ニ淨業成辨シ、臨終ノ時、諸ノ障礙ナク、身心快樂ニシテ禪定ニ入ルガゴトク、勝緣勝境目前ニ現ジ、親シク聖衆ノ迎接ヲ蒙リ、決定上品ノ往生ヲ遂グルコトヲ得セシメ給ヘ。(下略)

化他發願文

弟子開通、大志ヲ荷擔シテ本願念佛ヲ勸説シ、諸ノ衆生ヲ救済セント欲スルノ微志ヲ加被シ給ハンコトヲ求請シ奉ル。願クハ大悲大悲ヲ以テ哀愍護念シ、證明知見シ給へ。(中略)唯願クハ我慈悲際限ナク、諸佛大悲於苦者心偏愍念常沒衆生ノ意ヲ忘レズ、偏ニ念佛一行ヲ説キ勸テ淨土ニ歸セシメ、教化常ニモノウキコトナク、自行精進ヲシテ決定往生シ、畢竟成佛シテ生死海ヲ超エンコトヲ。(下略)

願文の終りには「吉水正統勸進沙門一向專稱阿彌陀佛開通」と、上人は自署している。上人には宗教者としての誠實と情熱とがあつた。いまこの發願文を拜誦するだけでも、我等の心は慚愧と景仰とに肅然とする。いつまでも私たちの心に残るのは、上人の自行化他の眞實である。

さて化他という面、衆生を開化するという立場からは、差し當り説法ということが考えられる。昔、フルナ尊者がユルナ國え傳道に出かける時、釋尊「から罵倒されるよ、」氣つけないと殺されるよ、と注意されたが、「殺されても本望です、」と答えたという話を讀んだことがある。かゝる熾烈な傳道的情熱はそれを想い見るだけでも、心が引きしまるような氣がする。

説法者は説法者らしいことを考えるがよい。説法には四無碍辯といふことがよく云われる。それは(一)法と(二)義と(三)辭と(四)辯とにおいて自由自在、碍りなきことである。歸三寶の心と絶えざる學道の苦杯を嘗めつくさねば、法は會得されず、智慧の眼も開けてくるものではない。眞實の義は廣くて深い體驗のない者には分らない。辭の自由は高い教養と強い忍耐がなければ身につくものではなく、辯自在たるためには絶えざる修練と燃えさかる傳道的情熱が常に生き／＼と脈動していねばなるまい。法無碍、義無碍、辭無碍、辯無碍、この四拍子が揃い得てこそ、始め

て眞の説法者たることを得るのである。至難といえばまことに至難である。しかし傳道に生きることを念願するものは、學びて厭わず、その勞苦を避けることを欲せぬのである。

『瑜伽師地論』(第二十五卷)が説法者のことを「善友」と稱しているが、その性向を分別すればどういう形のものになるか。鋭いメスがあてゝある。

第一、禁戒に安住していること。

第二、多聞を具足していること。

第三、能く所證あること。

第四、性ひなとなり哀愍多きこと。

第五、心に厭倦なきこと。

第六、善く能く堪忍していること。

第七、怖畏あることなきこと。

第八、語具ごぐに圓滿なること。

噛みしめてみれば、「善友」ならではと思わるゝ箇條ばかりである。

第一、禁戒に安住すというは、今日の言葉にすれば宗教者らしいこと、行清く徳高くとも云うべきであらうか。人を導き、人を動かすには、徳がなくては叶わぬことである。まづ人間が出来ていねばならぬ。徳香は風に逆つて薫するというのである。

東晋の聖者、廬山の慧遠は三十有餘年一步も山を出なかつたが、その徳風は一代を心服せしめた。あの僧尼沙汰

という大嵐の場合、傲骨な桓玄をして廬山を除外せしめたのも、慧遠の徳であつた。譯經の第一人者覺賢、才氣縱横の謝靈運など百名ばかりの當代一流の僧俗が慧遠の牛耳る白蓮社の社中であつたのも、その徳の高さから來てゐる。

手近なところでは、山口縣の大日比三師がよい例證である。法岸、法洲、法道の三師は揃ひも揃つて禁戒に安住した清教徒であつた。あの徳化の高い香氣は今に山口縣界限に薰つてゐる。知恩院の尊超法親王が「予がこのたび順次往生を遂ぐるは、全く西海の法洲和尚の餘光なり」と述懐されたことを考へてみる時に、あの人たちの教化の徳とその深さがわかる。繪の花には香氣がない、とか。要はやはりこれにたずさわり、これを説く「人」の問題である。教化の問題は常に宗教者の問題に歸るわけである。

第二、多聞を具足するというのは、教化が生きた社會に貢獻せねばならぬ限り、無視出來ない要請である。社會は日に／＼變化する。歴史は絶えず書きかえられる。新聞、雜誌、ラジオ、映畫が文化の一形態として果してゐる役割は實に大きい。こうした大きな歴史の流れの中で生きているのが一般大衆で、その老若男女が説法教化の對象である。今日の説法は今日に生きたものでなければならぬ。何等かの意味で「今日如何に生くべきか」を説いていなくてはならぬ。そうすると、説法者たるものは常に時代感覺に鋭敏であり、近代人としての高い教養と廣い知識（多聞）を持つた人間であるべきは當然である。

大正のはじめ頃、高野山大學で金山穆韶先生にはじめてお目にかゝり、その風格に接したのは六年間ぐらゐに過ぎないが、私にとつては何か一生忘れられないものがある。先生と柳田謙十郎氏との共著である「日本眞言の哲學」（昭和十八年七月、弘文堂刊行）をいち早く手にしたのもこれがためである。その柳田氏のまへがきを讀んで行くと、

金山先生の多聞、その學的情熱に驚倒し景仰している筆者の心が紙の上に溢れているような思いをさせる。

「私が高野山大學に講師として毎月一回位づつ西田哲學の講義をすることになったのは一昨年（昭和十一年）の春のことであつた。最初はほとんど義務的な講義であまり氣乗りもしなかつたのであるが、回を重ねるにつれて學生や一部の教授達までが熱心に聽いて下さると、特に學長金山穆韶師が身の御老齡をいとはず學生と共に缺かさず聽講して下さるのに激勵されて段々と火の出るやうな思ひを以てその情熱を傾けるやうになつた。しかし私には金山老師のやうな方がどうして私ごときものの講義をかくも熱心にきいて下さるのかその意味を解することができなかった。間接に御たづねして見ると、私の講ずる西田哲學の内容の中に何處か高祖弘法大師の御精神と一味相通するところがあるらしいといふ。これは私の全く豫想だにもなし得なかつたところであり、自ら省みて冷汗三斗の思ひを禁じ得ないとともに、また何かしら敬虔の念に打たれて合掌せざるを得ないものがあつた。」

これを讀んでみても、金山老師の求めたものを窺うことが出來よう。老師を知るものでも、知らないものでも、老師の求めたものを求めなくてはならぬ。今日法を説くものは、色んな學問にも關心をよせ、眞理のきびしさに觸れなければならぬのである。

第三、能く所證ありというのは「しん驗」一つを擲んでいるということである。「しん驗」はいかにしてつかめるか。人生の一呼吸、一呼吸が體驗である。この體驗を反省するもの、積り積つた人間體驗の中から「しん驗」が生れる。先賢・古徳が永い學道精進の後に、始めて到達した境地というものは、いかなる場合でも崇高なものを持つてゐる。

「求驗は、たゞ經相文字のうへにとどこふらず、佛法に於て、しるし、一つ見出してんと思ふべし。しからざれば死佛法となるなり。」（佛定和尚行業記下）

これはある古徳が残した三種の痛鞭策の一つである。現實に本願を信じ、念佛を喜ぶ感情をもち、眞實の安心に到達していない限り、その說法は結局法の取次ぎ以上のものではない。

法の死活は說法によつてきまるのではなく、たゞこれを實證する人によつてきまるのである。蓮如上人も「教化する人、まづ信心をよく決定して、その上にて聖教をよみかたらば、きく人も信をとるべし」(御一代記聞書第十三節)と、この點を強調している。「信は力なり。」何か強いもの、驗一つを持つてゐることは、大衆を教化し安立せしめるためには絶対に必要なことであらう。

第四、性ひととなり哀愍多くというのは、教化ということもその本は心もとばえ、愛の問題だということを意味している。愛のない說法は眞の說法ではない。說法者は大衆の苦惱を民衆の一人として苦しみ悩む溫い苦勞人であることが強く要請される。「說法の者に於ては醫王の想をなし、拔苦の想をなせ」と『大集經』に示されてあるように、要は法は説かれても、それによつて苦を抜きとつてやるだけの溫さを忘れてはならぬということである。悩める衆生に同感し、そのかなしみを共に泣く心なくしては、法も活きず、人も救われよう筈がない。常啼菩薩は人の貧苦や病苦に悩むを見て常に啼いた、と『智度論』(卷九十六)に見えている。「諸佛の大悲は苦者に於いてす。心偏に常泣の衆生を愍念し給ふ。」(觀經疏・玄義分)というが如き愍念の心、大悲の精神を離れて、說法の眞の動機というものはあり得ないのである。

第五、心に厭倦なく、というのは說法者の精進と情熱との問題である。說法もまた學道を背景として始めて確實となることを得べく、學道を忘れた說法には成功が伴ないにくい。實際教化に當る者は、學びて厭あははず、人を誨おしへて倦むことを知らぬ人でなければならぬ。教化が實を結ぶのには苦闘幾年の曉を俟つ覺悟を必要とするであらう。

『維摩經』にも「來り求むる者を見ては善師の想をなすべし。」(菩薩行品)と書いてあつたと思う。

一切善知識、說法者としては、來り求むる者には、法を説きて悟むことなく、互に學び互に磨き合い、どこまでも自己自らの問題として研究しようとする若々しさを常に保持せねばなるまい。

また、よい說法者、すぐれた學匠は人を導くこと、後進を育て上げることが、ゆめ忘れるものではない。「我法は然阿に授け畢りぬ。法燈何ぞ消えん。然阿は是れ予が盛年に還れるなり。遺弟此人に對して不審を決すべし。」(決疑鈔第五)。嘉禎の昔、辨阿老師が後進然阿上人を傳法の器と見込んで、日夜老を忘れて育てぬいた芳躅は、幾度仰ぎ見ても足りない思いがする。更にかの禮阿老上人が深更禪窓の下に師弟相對して「予、一期ノ間、汝ヲシタテタルノミガ、化導ノ思出ニテアル也」(授手印向阿眞筆本裏書)と愛弟向阿證賢上人に口走つた時の心底は、落涙數行、佛に合掌するだけであつたろうと思う。今一つ、貞極上人が厭求老師の激勵を蒙り、關東遊學六星霜、苦學力行、識見も高まり宗戒兩脈もうけて、老師を京都岡崎の草庵に訪うた時、老師は默然として語らなかつたということである。上人は辭して再び東上、屏居潛心、楞嚴經を讀み破ること三年、書冊の糸も切れた頃、上人が一つの悟りを得て、老師の許へ歸つてくると、老師は從容として「汝、學既に成れり」と微笑したと傳えられている。(貞極大德傳)心に厭倦なく、指導し、激勵し、鞭撻して、傳法し、說法する、その結果として法が弘まるのである。

第六、善く能く堪忍しとは、『論』の上には「罵るとも報ひ罵らず、瞋るとも報ひ瞋らず、打つとも報ひ打たず、弄ぶとも報ひ弄ばず」と註してある。千古の金言である。人怒つて瓦石を投ずるも厭わず、常に人間互尊の合掌をしたというので常不輕と稱せられた菩薩の話が『法華經』(卷七、常不輕菩薩品)に出ている。また「能く忍を行する者は乃ち名づけて有力の大人となすべし。」(佛遺教經)という聖語もあるように、忍辱は實に容易ならざる行であ

るだけに、それだけまた尊いのである。

第七、怖畏あることなくというのは、どんな人の前へ出ても、ひけを取つたり、場敗けせぬだけの見識と自信を持てというのである。人が演説とか説法で感激したり共鳴する場合は、いつも説く人が説く人自身の思想・信念の立場で物を言い、その上にがっちり座つてゐる時である。あの専修念佛停止事件の大嵐の中に立つて、動かざること巖の如く「われたとひ死刑にをこなはるとも、この事いはずはあるべからず」（勅修傳卷二十三）と言ひ放つた宗祖の一言は、また實に堂々たる雄辯ではないか。趣はちよつと變るが、徳本行者は「我、念佛する時は即ち阿彌陀なり、説法する時は即ち釋迦なり」（徳本行者傳卷中）と、壯語されたと傳えられる。しかしかくの如きは如來地に遊入せる行者の特殊な例で、誰もが直ちに眞似てはならないものがあるようである。

第八、語具さに圓滿なりというのは、聽いて理解し易い語、明快な語、ソツのない、磨きのかゝつた語、私心なき語、更に和顔愛語が説法の第一要件だといふのである。嘗て永井柳太郎氏が議政壇上から「西にレーニン、東に原敬あり」と磨きのかゝつた名調子で呼びかけた時、果せるかな滿場の議席は思はず彼に絶賛の大拍手を送つたものであつた。またすぐれた講壇の人たちは、怖い顔をしたり、叱りつけるような調子で話しかけることは絶對にならぬ。説教や講演は懸河の辯だけの問題ではない。説聽一如、聽く人と説く人とが融け合い、うなづき合う場面から見ると、適所に置かれた和顔愛語の力は存外大きい。對談、座談にあつては殊にその感が深い。それにつけても思ひ出す。

「師、不可意のことありて、氣色常ならぬ時にも、一文一句の法義をもたづね、または演説し、或は佛道修行の人、念佛往生人のものがたりなどすれば、直に顔色和らぎて、微笑應對せられけり。それより後は、たゞ何

のことなく、常の風情なりき。」（佛定和尚行業記下）

學ぶべきことだと思ふ。やはり佛定和尚はその筋の大物である。

說法清規としてはこの『瑜伽論』の説はすべてを代表しているような趣がある。說法にたづさわる者、關心をよせる者がこの『瑜伽論』から學びとるところは實に多からう。『瑜伽論』を読み出すと、更に大藏經えと心をゆずることになる。

說法という事實の前に、道心ある信者の現れてくるのも自然である。法を聞いた信者が、回心向大、善友となつて法の喜びを頌ち合うのも、ある意味における說法であり、よい說法者であらう。

いかなるはかり事をめぐらしても、人をすゝめて念佛せしめたまへ。あへて人のためには侍らぬぞ。（勅修傳、卷三十五）

これは宗祖がある信者にかへすゝも附屬された御詞である。教化ということは、くり返し述べたように自他共に教化されることで、人間一切が師弟であり、互に師友たるべしというのが、佛教の根本義である。僧といわず俗といわず一切善知識、互に自分の獲させて貰つた喜びを、一人の人にも多く頌けたい、分ち與えるにはどうすればよいかの關心と實行が望まれるのである。

七

風情は違ふが、昔から身業說法ということがよく言われる。これは徳行自體から薰發する自然の教化のことであ

る。解行一如は學道の理想であるとしても、人は天稟によつて或は解學に長じ或は行學に秀でることも避けがたいであろう。しかも行學なるものが時に解學にもまして力強い度生の方便であり、感化教導の大力であるのには、むしろ驚かされる。

「源空は智德をもて人を化する、なを不足なり。法性寺の空阿彌陀佛は愚痴なれども、念佛の大先達として、あまねく化導ひろし。我もし人身をうけば、大愚痴の身となり、念佛勤行の人たらん。」（勅修傳、卷四十八）

「淨土の法門と遊蓮房とにあへるこそ、人界の生をうけたる、思出にて侍れ。」（同上、卷四十四）

愚痴の人空阿彌陀佛、一介の道心者遊蓮房、この二人の弟子がその輝かしい行德のゆえに、宗祖から破格の讃嘆と隨喜を受けていることは、われ／＼の心に強く、深く焼きつけるものがある。

「是法法師は、淨土宗に恥ぢずといへども、學匠を立てず、たゞあけくれ念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。」（徒然草第四十二段）

こゝにも頭の下がる行學の人がいる。「桃李言わざるも下自ら蹊をなす」という古人の言葉を思い出す。行學の德は無言の説法である。その德は思つたよりも大きい。解學も大切であり、説法も大事であるが、一面行學の德を思い念うと、いろ／＼と考えさせられることが多い。

八

なほ化他の面で重視されねばならぬものに文書傳道がある。その傳道力は意外に大きく、また長いものがあるようである。「當世を化するは辯にしくはなく、後代を化するは文にしくはなし。」と道破した古賢もあつた。見よ

うによつてはその教化力は説法よりもさらに大きいといえるかも知れぬ。思いをこゝにいたせば、宗教者はもつと文書傳道に着目しなければならぬ筈である。

佛教が、各宗がその正しい姿を一般の人々に理解せしめるためには、まづ何よりも近づき易く、親しまれる讀み物をもつことが大切である。

親しまれ、愛される讀み物をもたない宗門が榮える例の少いことは、もとより言うまでもない。むつかしい言葉で、肩のこるようなものを人に押しかぶせるようでは傳道性に乏しい。實もあり、味もある、よい作品は天分にもよるが、また絶えざる勉強にも負うている。佛法味を、法の悦びをすぐれた作品を介して世間に贈ることは、確かにむつかしい仕事であり、重荷といえはこれほどの重荷はあるまい。しかし古今の聖賢、文人者流が一字一句にも死力を盡した苦心談は枚舉に遑がない。それでこそ世間がむさぼり讀むのである。作品をして不朽たらしめるのである。善導大師がその著『觀經疏』の筆を投ぜんとして「一句一字も加減すべからず。寫さんと欲する者、一に經法の如くすべし。應に知るべし。」と書き得た時の心境に思いを運び、仰いでその大悲心を學び、伏して應分懸命の努力を誓うべきではないか。志願だけでは作品は生まれない。「筆を取ればもの書かる」と古人も教えたように、宗恩に報い奉るの道はまづ筆をとることである。粉骨碎身、潜心に筆を進めることである。知恩報恩の行はこれを措いては他にあるまいと、しみじみと思うことがある。言を寄す、よい讀み物が與える傳道力は意外に大きいのである。

化他の問題も、むずかしく考えればなかく厄介である。しかし世の教化に當る宗教者、われ／＼宗門人は自ら考え、自ら反省し、まづ社會に向つて心を開き、大衆をつかむことに、もう少し智慧をしぼらねばなるまい。

まあ、この邊で筆を擱いて他はまたの機會を俟ちたいと思う。